

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320046

研究課題名（和文） 〈日本幻想〉の研究-表象と反表象のダイナミックス

研究課題名（英文） “Visionary Japan” :Representations and Counter-Representations of Japan in Literature and Arts

研究代表者

野田 研一（NODA KENICHI）

立教大学・異文化コミュニケーション研究科・教授

研究者番号：60145969

研究成果の概要（和文）：英米文学および英米文化の研究を通じて、英米圏における〈日本幻想〉の胚胎・生成とインパクトの諸相を総合的かつ具体的に検証することをめざした。（ただし、課題の性格上、日本文学に関する研究も含まれる。）理論的には表象論を基底に据え、コロニアリズム/ポストコロニアリズムにおける「接触界域」(contact zone)論を踏まえつつ、日本表象に内在する複雑なダイナミズムを明らかにした。具体的には、言説としての〈日本幻想〉生成のプロセスを複数のテーマ設定によって分析した。これらのテーマは、連続的な生成プロセスであり、明瞭な区分を与えることは困難であるが、このプロセス全体を通じて、所定の個別化された〈日本幻想〉が産出・消費されてきたものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed at a comprehensive approach to the idea of “visionary Japan” or “images of Japan,” generated, formed, and developed in conjunction with the influences of British and American literature and culture. It also examined some related aspects of Japanese literary history. This project, based theoretically upon the ideas of trans-cultural “representation” and “contact zone” within the context of colonial/post-colonial criticism, explored and revealed how the shaping process of “visionary Japan” has been highly complicated. The literary and cultural discourses on the “visionary Japan” were analyzed through multiple viewpoints which revealed the continuing process of producing the images of “visionary Japan.” “Visionary Japan” has been produced and consumed individually through such a comprehensive process.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	6,700,000	2,010,000	8,710,000
2009年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2010年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
年度			
年度			
総計	16,500,000	4,950,000	21,450,000

研究分野：アメリカ文学、環境文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：植民地主義、表象、移動、異文化

1. 研究開始当初の背景

〈日本幻想〉とは、19世紀西欧美術にお

けるジャポニズムなどがその典型例であるが、本研究では、いわば「輸出された」日本のイメージ、もしくは所定の歴史的状況下で、英米圏によって「見られた」日本を、ジャポニズムという歴史的に特定化されたムーブメントとして限定的にとらえるのではなく、「日本をめぐる諸表象」として広義にとらえる。いいかえれば、「日本版オリエンタリズム」を〈日本幻想〉として再定義し、英米文学およびその周辺の文化諸現象において産出され続けた、日本をめぐる言説、表象、イメージ、さらにはそこに不可避的に随伴するイデオロギー性を、共同研究者による多様な視座から広範な検討に付す。

ただし、本研究の重要性は、「見る」主体者としての英米圏によって「見られた日本」の言説を主題化するだけでなく、そのように「見られた日本」というテキストに対して、「見られた日本」（＝客体）の側がいかなる対応を見せたかをも歴史的に検証する点にある。〈日本幻想〉をめぐる言説に向けて、「見られた日本」（＝客体）が、自己投企を行い、自己同一化と自己成型を遂げる事態もまた生起しているのではないかとする視座をそこに設定した。

副題は「表象と反表象のダイナミクス」としている。本研究では、一面的に表象の限界を問題化するのではなく、そのような表象性を揺さぶり、環境情報との相互作用の動きとしてとらえる「反表象」の塑型性をも理論的、歴史的に把握することを前提とし、表象のダイナミクスの全体像を提示する。なぜなら、表象の形成を検討する場合、権力関係、歴史的状況などの諸力を通じて一元的に固定化されるイデオロギー的な展開としてとらえるだけでなく、むしろ「反表象」論的視座を設定することにより、表象性の問題をよりダイナミックなプロブレマティクスとして把握することができるからである。

なお、ジャポニズムを直接扱う学会がすでにあり、ジャポニズム関係の研究（論文、著書）は少なからず公表されているが、本研究は、狭義のジャポニズム研究ではない。それが、〈日本幻想〉という個性的・特徴的な研究テーマを掲げた理由である。また、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』に対する根底的な批判を行ったジョン・M・マッケンジー『大英帝国のオリエンタリズム』な

ど、オリエンタリズムをめぐる近年の歴史・文化研究の動向の理論的整理も不可欠であった。

## 2. 研究の目的

英米文学および英米文化の研究を通じて、英米圏における〈日本幻想〉の胚胎・生成とインパクトの諸相を総合的かつ具体的に検証した。（ただし、課題の性格上、日本文学に関する研究も含むものとする。）理論的には表象論を基底に据え、コロニアリズム・ポストコロニアリズムにおける「接触界域」（contact zone）論を踏まえつつ、日本表象をめぐる複雑なダイナミズムを明らかにした。具体的には、言説としての〈日本幻想〉生成のプロセスを次の3つのテーマ設定によって分析した。この3テーマは、連続的な生成プロセスであり、明瞭な区分を与えることは困難であるが、このプロセス全体を通じて、所定の個別化された〈日本幻想〉が産出・消費されるものとする。

（テーマ1）〈日本幻想〉産出の様態：「見る」と「見せる」

（テーマ2）表象のダイナミクス：「見る」「見せる」・「見られる」

（テーマ3）〈日本幻想〉への自己投企：客体の擬似主体化・属領化

## 3. 研究の方法

研究は、共同研究プロジェクトとし、研究代表者1名、研究分担者7名、連携研究者1名を以て構成した。この9名の専攻は、イギリス文学5名、アメリカ文学4名で構成されるが、これを大きく2つの研究班（研究班A：理論系、B：歴史系）に分割した。ただし、これら2グループは固定的な枠組みではなく、つねに横断的に相互参照する関係として位置づけた。（類別は以下のとおり。）

研究班A（理論系）：個別研究テーマにしたがって、〈日本幻想〉が発生する観念史的・社会史的機制を、その成型因となっている異文化間の「接触界域」（contact zone）をめぐる問題として検討し、表象のダイナミズムとメカニズムを理論化する。とくに「反表象」の理論化とモデル化を検討した。

研究班B（歴史系）：〈日本幻想〉の具体的事例を文学、美術、映像、庭園史、都市論、

児童文学から博覧会などの文化イベントに至る多様な領野に渉猟しつつ、その歴史的コンテクストと表象/反表象のダイナミズムを明らかにした。

下記の3テーマを検討し、理論的な深化を進め具体的事例の提示を行い、結果として、

(1) ～ (4) を明らかにした。

(テーマ1) 〈日本幻想〉産出の様態：「見る」と「見せる」

(テーマ2) 表象のダイナミックス：「見る」「見せる」・「見られる」

(テーマ3) 〈日本幻想〉への自己投企：客体の擬似主体化・属領化

(1) 表象論としての〈日本幻想〉が、その生成過程においていかなる機制を内在させ、同時にそれを促す特定の外的要因を見いだすことができるか。理論研究と事例研究により明らかにする。

(2) 〈日本幻想〉の広がりを経史的に捉え、またその対象範囲となる事例研究を飛躍的に拡大する。

(3) 「見られる」(客体)側が、「見る」(主体)側が案出する表象に自己投企するプロセスに注目することによって、サイド的オリエンタリズム論の硬直を批判的に乗り越える。

(4) 上記を通じて、表象(representation)論そのものの新たな理論的整理と知見が可能となる。

#### 4. 研究成果

本研究の目的は、英米文学および文化の研究を通じて、英米圏における「〈日本幻想〉の胚胎・生成とインパクトの諸相を総合的かつ具体的に検証する」ことにある。研究体制は、研究班A(理論系)と研究班B(歴史系)の2グループを編成し、それぞれグループ責任者を配置して、研究体制を管掌するとともに、各メンバーの個別研究に関しては研究代表者が包括する研究体制を構築した。最終年度(平成22年度)には、①「共同研究報告書：〈日本幻想〉の研究-表象と反表象のダイナミックス」(2011年3月1日付、立教大学)を刊行、各研究者による報告書をまとめた。さらに②最終の合同研究会を同年3月27日(日)～3月29日(火)の日程で(場所：ノートルダム女子大学)開催し、研究代表者野田による総括的な理論的整理を行うと同時に、各メンバーの個別研究に関する報告を受け、討

議を進めた。基調講演に北川扶生子氏(鳥取大学)を招聘し、明治近代における言語表象の問題を提起していただき、本研究プロジェクトの出版に関する予備的議論も進めた。各メンバーによる研究課題は以下のとおりである。

研究班A：表象/反表象生成過程における理論の検討(笹田直人)、「発見の物語」と時間旅行(野田研一)、江戸の清浄空間-予備的問題として(中村邦生)、人の移動とペリー(山里勝己)、

研究班B：日本を描く英米の児童書(高田賢一)、バーナード・リーチと日本幻想(久守和子)、アングロ・ジャパニーズ様式の隆盛とキプリング(中川僚子)、京都・無隣庵の造園：逆輸入された庭園(木下卓)、ヴァージニア・ウルフの〈日本幻想〉-作家ウルフの〈船出〉

研究班Aでは、他文化、異文化をめぐる表象が、植民地主義的文脈の中で、反表象として当該文化によって再提示されると同時に、それが「伝統の発明」やセルフ・イメージとして結果するプロセスを検討した。研究班Bでは、主に19世紀後半以降の表象/反表象プロセスを、各自の研究課題に即して検討した。

本研究プロジェクトは、「共同研究報告書：〈日本幻想〉の研究-表象と反表象のダイナミックス」(2011年3月1日付、立教大学)に公表した各メンバーの研究報告に基づき、『日本幻想：表象と反表象のダイナミックス』(仮題)として2012年春の出版をめざしており、そこでより詳細で精密な議論と調査内容を公開する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計21件)

(1) 木下卓、アフリカの記憶の場としてのカーニヴァル、査読無、文化伝統としてのアイデンティティ形成——記憶の場をめぐる——(平成22年度愛媛大学法文学部人文系担当学部長裁量経費 研究報告書)、2011、26-30

(2) 窪田憲子、エリザベス・ダロウエイの中国風の日——ヴァージニア・ウルフとジャポニスムの時代、文学研究、査読有、37号、2011、36-51

(3) 野田研一、〈風景以前〉の発見、もし

くは「人間化」と「世界化」、水声通信、査読有、33号、2010、116-128

(4) 山里勝己、野生と文学、水声通信、査読有、33号、2010、199-204

(5) 窪田憲子、韓国ウルフ学会に参加して、ヴァージニア・ウルフ研究、査読有、23号、2010、74-77

(6) 笹田直人、エコクリティシズムが目を凝らすところ、水声通信、査読有、33号、2010、129-134

(7) 中川僚子、エコクリティカル・ジェイン・オースティン—C. ブロンテ、D. H. ロレンスの批判を越えて、水声通信、査読有、33号、2010、170-177

(8) 窪田憲子、Barbara Caine, *Bombay to Bloomsbury: A Biography of the Strachey Family* (書評)、英文学研究、査読有、86巻、2009、52-57

(9) 山里勝己、大学の誕生——占領と琉球大学、戦時下・占領下・米国統治下における大学史料——2008年度全国研究会の記録於：琉球大学——、査読有、研究叢書第10号、2009、5-27

(10) 野田研一、Scott Slovic ed., *A Booklist of International Environmental Literature, World Literature Today: Literature, Culture, Politics*、査読有、83(1)、2009、7-8

(11) 野田研一、環境コミュニケーション論・覚書—交感と世界化、持続可能な未来のための異文化コミュニケーション学—明日の国際理解教育への試案、査読有、一、2009、33-46

(12) 中村邦生、忘却と熱の精度——記憶の感触22、水声通信、査読有、23巻、2008、176-182

(13) 野田研一、世界は残る。・・・失われるのはぼくらのほうだ：〈いま/ここ〉の詩学へ、水声通信、査読有、24巻、2008、42-50

(14) 中川僚子、「何かがいる」という感覚—D. H. ロレンスと自然、水声通信、査読有、24巻、2008、76-85

(15) 山里勝己、アメリカン・サブライムとエコロジカル・サブライム—エマソン、ホイットマン、スナイダーの〈交感〉表象、水声通信、査読有、24巻、2008、66-75

(16) 中村邦生、異物、または調和の幻想①——記憶の感触23、水声通信、査読有、24巻、2008、136-142

(17) 中村邦生、異物、または調和の幻想②——記憶の感触24、水声通信、査読有、25巻、2008、184-190

(18) 中川僚子、廃物を見つめるカズオ・イシグロ—ゴミに記憶を託す、水声通信、査読有、26巻、2008、86-97

(19) 木下卓、カズオ・イシグロにおける戦争責任——『信頼できない語り手』が語る、

水声通信、査読有、26巻、2008、124-133

(20) 中村邦生、愛かもしれない①——記憶の感触25、水声通信、査読有、26巻、2008、170-177

(21) 中村邦生、愛かもしれない②——記憶の感触26、水声通信、査読有、27巻、2008、216-222

[学会発表] (計16件)

(1) 中村邦生、特別講演：〈速度〉のポリテクス—文学を再考するために、シンポジウム：英文学研究ネットワークの再構築、2011年1月29日、沖縄キリスト教学院大学

(2) 野田研一、The Discovery of Pre-landscape and Post-Romanticism, The Fifth Tamkang International Conference on Ecological Discourse、2010年12月17日、台湾：淡江大学

(3) 窪田憲子、The Japan-British Exhibition of 1910 and Virginia Woolf, Woolf contemporaine / A Contemporary Woolf Colloque de la Société d'Etudes Woolfienne s, MMSH、2010年9月19日、フランス：エクス＝マルセーユ大学 Université ' Aix-Marseille I, France

(4) 高田賢一、動物物語と多文化主義、文学・環境学会、2010年8月28日、新潟十日町市まつだいふるさと会館

(5) 中川僚子、シンポジウム発表：交感論の可能性—イギリス小説を例に、文学・環境学会、2010年8月28日、新潟十日町市まつだいふるさと会館

(6) 窪田憲子、Elizabeth Dalloway's Chinese Eyes: Virginia Woolf and the Age of Japonisme, The Korea-Japan Virginia Woolf Conference in 2010、2010年4月23日、韓国：梨花女子大学 Ewha Woman's University, Korea

(7) 山里勝己、Gods beyond the Sea (Umino Tinzakai) By Oshiro Tatsuhiro trans. Katsunori Yamazato, 琉球芸能のいま、Ryukyuu Performing Arts Today, 玉城流扇寿会琉球芸能公演、2010年1月31日、カリフォルニア州トーレンス市エルカミノ・カレッジ Marsee Auditorium

(8) 野田研一、Narratives of Ecodisasters and Apocalypse (司会およびコメント)、An International Conference on "The Future of Ecocriticism: New Horizons"、2009年11月4日、トルコ、アンタルヤ市

(9) 野田研一、Tradition and Modernity: Ecocriticism in Japan (招待講演)、Eco-Philosophy and Future Direction for Ecocriticism、2009年7月16日、台湾、台北市、淡江大学英文科

(10) 山里勝己、Coming to Hawaii from the Remotest Corner of a Rising Empire: Some Okinawan Male Characters in *Lucky Come Hawaii*, International Conference: Human Migration—Immigration, Language, and Literature, 2008年11月30日、琉球大学

(11) 中村邦生、〈嘘〉を蒔くこと——感情のレッスンとしての物語、日本イギリス児童文学会、2008年11月8日、清泉女子大学

(12) 山里勝己、惑星思考とゲーリー・スナイダーの『終わりなき山河』、日本アメリカ文学会、2008年10月12日、西南学院大学

(13) 山里勝己、大学の誕生—占領と琉球大学、全国大学史資料協議会、2008年10月9日、研究者交流施設五〇周年記念館

(14) 野田研一、Beyond the World of Words: Edward Abbey, Annie Dillard, and Jorge Luis Borges, International Conference on Ecology and Languages, 2008年8月22日、アルゼンチン：国立コルドバ大学

(15) 山里勝己、The Background and Some Problems Concerning the Establishment of the University of the Ryukyus, アメリカ学会、2008年6月1日、同志社大学

(16) 山里勝己、環境文学とはなにか、沖縄ロマン派学会、2008年4月20日、西部オリオンホテル

[図書] (計22件)

(1) 山里勝己 (編著)、ミネルヴァ書房、シリーズ・アメリカ文化を読む1〈移動〉のアメリカ文化学、2011、283

(2) 高田賢一 (山里勝己編著)、ミネルヴァ書房、シリーズ・アメリカ文化を読む1〈移動〉のアメリカ文化学、2011、21

(3) 高田賢一、他、ミネルヴァ書房、はじめて学ぶ英米絵本史、2011、22

(4) 中村邦生、他、水声社、小島信夫批評集成①現代文学の進退、2011、14

(5) 笹田直人 (編著)、ミネルヴァ書房、シリーズ・アメリカ文化を読む3〈都市〉のアメリカ文化学、2011、283

(6) 中村邦生 (編著)、岩波書店、生の深みを覗く、2010、473

(7) 山里勝己、琉球新報社、琉大物語 1947—1972 (A Narrative History of Ryudai, 1947—1972)、2010、284

(8) 山里勝己 (石原昌英、喜納育江、山城新編)、彩流社、『沖縄ハワイ コンタクト・ゾーンとしての島嶼』、2010、460

(9) 山里勝己 (共編)、沖縄タイムス社、知の津梁——やわらかい南の学と思想・3、2010、417

(10) Katsunori Yamazato and Frank Stewart, Honolulu: University of Hawaii Press, Voices from Okinawa 〈オキナワ系アメリカ文学アンソロジー〉、2009、213

(11) 野田研一、アティーナ・プレス、別冊解説：シートンという地図—動物論の時代へ、2009、12

(12) 木下卓・窪田憲子・久守和子 (共編著)、ミネルヴァ書房、イギリス文化 55のキーワード、2009、247+29

(13) 窪田憲子、ユーリカ・プレス、別冊解説：〈不思議の感覚〉がはぐくむ知の世界—イギリス児童大百科、2009、30

(14) 山里勝己 (共編)、沖縄タイムス社、やわらかい南の学と思想—琉球大学の知への誘い、2008、447

(15) 山里勝己 (共編)、沖縄タイムス社、融解する境界 やわらかい南の学と思想・2、2009、231

(16) 中村邦生 (千石英世・千葉一幹・編著)、ミネルヴァ書房、ミネルヴァ評論叢書〈文学の在処〉・名作は隠れている、2009、11

(17) 高田賢一 (桂宥子・白井澄子編)、ミネルヴァ書房、シリーズ もっと知りたい名作の世界⑩ 「赤毛のアン」、2008、11

(18) 高田賢一 (朝日由紀子編)、白百合女子大学言語・文学研究センター、人間と動物をめぐるメタファー、2008、15

(19) 久守和子 (中村邦生・吉田加南子編)、大修館書店、ラブレターを読む—愛の領分、2008、16

(20) 中川僚子、(中村邦生・吉田加南子編)、大修館書店、ラブレターを読む—愛の領分、2008、15

(21) 中村邦生、他編著、大修館書店、ラブレターを読む—愛の領分、2008、14

(22) 窪田憲子、他、彩流社、マーガレット・アトウッド、2008、37

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

野田 研一 (NODA KENICHI)

立教大学・異文化コミュニケーション研究科・教授

研究者番号：60145969

### (2) 研究分担者

山里 勝己 (YAMAZATO KATSUNORI)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：80101450

木下 卓 (KINOSHITA TAKASHI)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：00136293

高田 賢一 (TAKADA KENICHI)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：20008048

中村 邦生 (NAKAMURA KUNIO)

大東文化大学・文学部・教授  
研究者番号：10119422  
窪田 憲子 (KUBOTA NORIKO)  
都留文科大学・文学部・教授  
研究者番号：60178051  
笹田 直人 (SASADA NAOTO)  
明治学院大学・文学部・教授  
研究者番号：10170705  
中川 僚子 (NAKAGAWA TOMOKO)  
聖心女子大学・文学部・教授  
研究者番号：90192666

(3)連携研究者  
なし

研究協力者  
久守 和子 (HISAMORI KAZUKO)  
元フェリス女学院大学・教授